美術教育学の制度的基盤の成立過程
－岡山大学における人的制度と配置－

有田　洋子*

Yoko ARITA

A Historical Research on Establishment of the Staff of Art Education in the College：The Case of the Faculty of Education of Okayama University

要　　旨

岡山大学の場合の美術教育学の制度的基盤の成立過程（人的制度の成立と人的配置）を次のように明らかにした。1. 岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行：図画工作担当教官はほぼ大学に移行したが，美術科教育を専門とする教官はいなかった。当然ながら，制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず，「美術教育学」も認識されていなかった。2. 学科目の設置と具体的人員の配置：昭和39年の学科目制度発足以前に，美術科教育を専門に担当する教官がいた。制度的に美術科教育の専門性が保証される以前に，美術科教育の専門性が実質化されていた。3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：美術科教育を専門とする教官が揃い，昭和55年４月に教科教育大学院が設置された。これにより，岡山大学における美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。以上のように岡山大学は，全国の中でも先がけて美術教育学の制度的基盤が成立したことが特徴である。

【キーワード：美術教育史，美術教育学，学科目，大学院】

１．本稿の目的

本稿筆者は美術教育学の制度的基盤の成立過程を，全国の教員養成大学・学部の人的制度の成立と人的配置の調査から明らかにしようとしている。本稿は，岡山大学におけるそれを検証するものである。本研究における問題設定は，既に別稿で述べた[1)]。調査は次の三段階の時期区分に基づいて行う。

1. 戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部への図画工作担当教官の移行
2. 学科目の設置と具体的人員の配置
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開（人員の配置）

考察対象はこの三時期区分に基づき，戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部への移行期より，教科教育大学院の設置までとする。なお，岡山県師範学校，岡山師範学校，岡山大学教育学部における美術関係教官の人的配置表の作成にあたっては，その時期範囲を前後に拡大し，昭和10年から平成15年までとした。

２．概　　観

⑴岡山大学における成立過程の特徴

岡山大学の美術教育学の成立過程の概観を記す前に，その特徴を先に紹介しておく。

第一に，「特別教科（美術・工芸）教員養成課程」（以下，特設美術）の設置が挙げられる。同課程は当時，供給困難とされていた中学校および高等学校の美術・工芸の教員養成を図るため[2)]，北海道教育大学，岩手大学，東京学芸大学，京都教育大学，岡山大学，高知大学，佐賀大学の全国７大学に置かれていった。岡山大学は，７大学の中でも逸早く昭和28年に設置された。当時全国的に教員養成大学・学部では教科専門重視の傾向があり，特設美術設置はそれをより強めたと思われる。この特設美術設置に寄与したのが佐藤章（改名一章，以下一章）である。大学設置の翌昭和25年に，東京美術学校卒業の画家佐藤一章を美術講座初の教授として迎え，特設美術が設置された。この時の方針の影響は後々まで及ぶように見える。佐藤以後は，教科専門，特に絵画・彫刻の教官は日展系の社会的に高名な作家が代々赴任することになる。

第二に，昭和39年学科目制度発足以前に，美術科教育を専門に担当する人員が配置されていたことが挙げられる。昭和28年特設美術設置に伴い，学科目（に類するもの）が置かれたが、当初はまだ美術科教育のそれはなかったと思われる。厳密に言うと，学科目が置かれることと，人員が配置されることとは，意味が異なる。美術科教育の学科目の設置は，美術科教育の専門性が制度的に保証されたことを示し，人員の配置は，美術科教育の専門性が実質化されたことを示すことになろう。なお大学院設置の場合，美術科教育を専門とする人員が揃うことが院設置の条件であるため，そのような違いはない。

第三に，全国の中でも早い時期に教科教育専攻大学院が設置されたことが挙げられる。全国の美術の教科教育専攻大学院設置時期は順に次の通りである。まず昭和38年に設置され，昭和44年に専攻生の募集が始まり実質化

*　島根大学教育学部芸術表現教育講座

した東京芸術大学がある。続いて，昭和43年に東京学芸大学，昭和50年に大阪教育大学，昭和54年に横浜国立大学，そして昭和55年に岡山大学に大学院が設置された。

⑵岡山大学における三時期区分の概観

1. 岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行：岡山師範学校から岡山大学教育学部へ図画工作教官はほぼ移行できた。最初期は師範学校から移行した佐藤義太郎が教育法を担当したらしい資料はあるものの，美術科教育を専門とする教官はいなかった。当然ながら，制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず，「美術教育学」も認識されていなかった。
2. 学科目の設置と具体的人員の配置：昭和39年学科目制度発足以前に，美術科教育を専門に担当する教官がいた。美術・工芸科教育の担当教官として昭和32年に戸田忠吾が，昭和46年にその後任として黒川建一が赴任する。昭和28年特設美術設置に伴い学科目（に類するもの）が置かれたが，美術科教育のそれが置かれるのは昭和39年の学科目整備の頃である。美術科教育の専門性は，学科目整備により制度的に保障される以前に，人的配置により実質化されたと言える。ただ，戸田は手工・技術科教育，黒川は幼児教育を専門としていた。
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：大学院設置の準備期から美術科教育を専門とする教官の赴任があった。昭和50年に宮脇理，昭和53年に吉田漱，昭和54年に熊本高工が大学院設置要員として赴任し，昭和55年４月に大学院が設置された。これにより，岡山大学における美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。なお，教員養成大学・学部に大学院が設置され始めた最初期は，全国的に美術科教育を専門とする人材は少なかった。岡山大学のように，院設置に際し，学外から人材を招聘した大学は少なくない。それだけに大学院設置は大きな改革であったことが言える。

   昭和10年から平成15年までの，岡山県師範学校，岡山師範学校，岡山大学教育学部における美術関係教官の人的配置を表１に示しておく[3]。

３．各時期区分における様相

⑴岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行期

①大学への移行期の様相　岡山医科大学・岡山医科大学附属医学専門部・第六高等学校・岡山師範学校・岡山青年師範学校・岡山農業専門学校を主たる母胎として，岡山大学は法文学部・教育学部・理学部・農学部・医学部からなる総合大学として発足した[4]。理学部と法文学部の新設，一般教養要員のため，岡山師範学校及び岡山青年師範学校教官定員を大幅に供出することとなり，岡山大学教育学部は大学移行完了時の教官定員は55名で全国的に最小規模のスタートであった[5]。

教育学部（岡山市津島）は，岡山師範学校（岡山市門田）と岡山青年師範学校（倉敷市）を主たる母胎とする。最初期の美術講座は，岡山師範学校から移行した教官により構成された。岡山師範学校は昭和26年３月まで併置され，そこから大学への移行は徐々になされた。

岡山師範学校の図画工作教官は，工作担当の廣岡豊一を除き，岡山大学教育学部へ移行した。昭和24年に佐藤義太郎，昭和25年に渡辺正夫，昭和26年に大島勲が，師範学校教官から大学教育学部講師となった。

佐藤義太郎は，大正14年に岡山師範学校を卒業し，昭和３年に文部省検定（西洋画・用器画）合格となり，昭和15年より岡山県師範学校に赴任する。図画・絵画を主に担当したと思われるが，工作・図工を担当した年もある[6]。昭和25年からは日展・白日会・水彩連盟・日展水彩作品協会に作品発表していた[7]。なお，昭和３年の文部省検定の合格者に同じく岡山県師範学校出身の河井達海がいた。河井は大阪師範学校・大阪学芸大学の美術講座の中心的存在となっていった。

渡辺正夫[8]は，昭和２年に岡山市立岡山工芸学校を卒業し，昭和10年に文部省検定試験に合格し，昭和18年より岡山師範学校男子部に赴任する。工作（工芸・木工）を担当した。

大島勲[9]（大正５－平成３）は，岡山県に生まれ，昭和14年東京美術学校図画師範科を卒業し，熊本県天草中学赴任後，愛知県等の中学校に勤務し，昭和21年より岡山師範学校女子部に勤務する。図画（絵画）を担当した。画業に関しては，後に教育学部で同僚となる柚木祥吉郎の父の柚木久太が会長の洋画団体火虹会に所属し，昭和25年創元会第９回展初入選，昭和26年第７回日展初入選，昭和27年創元会会員，昭和54年創元会運営委員となったことが挙げられる。

岡山師範学校から岡山大学教育学部へ移行した図画工作教官は以上の三名である。なお岡山大学設置申請書に，芸能科（図画・工作・書道）とある[10]。大学移行期から昭和32年度までの『岡山県学事関係職員録』『岡山大学職員録』『岡山大学要覧』の教官名の記載も図画工作教官と書道教官は隣接しており，図画担当教官も工作担当教官も書道担当教官も全員「美術」教官として名簿に記載されていた年もある[11]。昭和33年度に教育学部人文（後の国語）講座に移るまでは，書道教官も図画工作教官と同所属とされたようである。書道教官に，絹田文夫と大館允雄がいた。ただ，特設美術は明確に美術・工芸の高等学校教員養成なので，書道は特設美術設置時に所属が移ったと思われる。実感とは異なるが，法律的に正式なのは科目，学科目であり，教官組織としての講座や教室は便宜的な各大学独自の措置と言われる。昭和33年あるいは特設美術設置期に移ったというよりも，岡山大学教育学部はそのような区分に修正したと言うのが適切かもしれない。

なお岡山大学の場合，美術講座は，かなり初期から美術と工芸の二室体制であった。いつからかを示す資料は確認できなかった。ただ先述のように大学設置認可申請書には芸能科（図画・工作・書道）とあり，教官も，図画（美術）あるいは工作（工芸）といった高等学校教科に沿った分担をしており，開学当初から実質はこの二体制で分かれていたものと思われる。他の多くの大学でも芸能科

（図画・工作・書道）の区分，美術教官の図画（絵画）と工作（工芸）の分担がなされていた。それを二室体制とするかは教官定員等の規模が大きく関係していたであろう。岡山大学が美術と工芸の二室体制となったと断言できるのは，高等学校の美術と工芸の教員養成を主目的とする特設美術の設置の頃である。

そして大学設置翌年の昭和25年に，佐藤一章が美術講座初の教授として学外から新規採用される。岡山大学では開学初期から特設美術設置の構想があった[12]。佐藤一章の牽引の下，昭和28年に特設美術が開設となる。

岡山大学の場合，師範学校から移行した教官群に新たに外部から教授として佐藤一章を招聘したこと，そしてその後に特設美術を設置したことが特徴であり，その後の展開にも影響した大きな出来事であった。特設美術設置直後にあたる昭和29年３月の教官と学生の写真を掲げておく（図１）。佐藤一章は中央である。当時の関係性がうかがえよう。大学発足直後，師範学校教官のみの講座には，学士取得者，旧帝大系教官，東京美術学校出身等の実技の実力者，日展等の当時社会的に認められていた展覧会の実力者などが新たに赴任することがあった。そのような場合，師範学校教官に比べて，それらの教官は最初から教授として赴任する等，職階や待遇が厚かった。岡山大学の場合もこれに当たろう。

②この時期の教科教育関係授業　昭和24年に岡山大学が発足してから昭和28年に特設美術が開設されるまでの間，美術科教育を専門とする教官は不在であった。師範学校教官は図画工作に関することであれば何でもできたとされる。佐藤一章を除き，師範学校教官であった佐藤義太郎・渡辺正夫・大島勲は，誰もが美術科教育を担当することは可能であったであろうが，誰もがそれを研究専門とするわけではなかった。ただ，この時期にも教科教育法の授業はあったわけで，誰かが担当しなくてはならない。これは他の多くの教員養成大学・学部が直面した共通の問題である。『岡山大学職員録』昭和25年度（10月30日現在）に「絵画（教育法）佐藤義太郎」とあり，少なくとも昭和25年度は佐藤義太郎が担当したものと思われる[13]。昭和25年度の人員構成，佐藤義太郎・渡辺正夫・大島勲・佐藤一章を考えると，最年長・最古参で，図画を専門としながらも工作指導歴もある師範学校教官であった佐藤義太郎が担当したのに不自然さはないだろう。ただ上記のような職員録への表記は，あくまでも絵画を主たる専門とした上で教育法も担当したというように見て取れる。

いずれにせよ，岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行期は，全国的にそうであったように，美術科教育を専門とする人材はいなかった。当然ながら，制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず，「美術教育学」も認識されていなかった。

⑵学科目の設置と具体的人員の配置

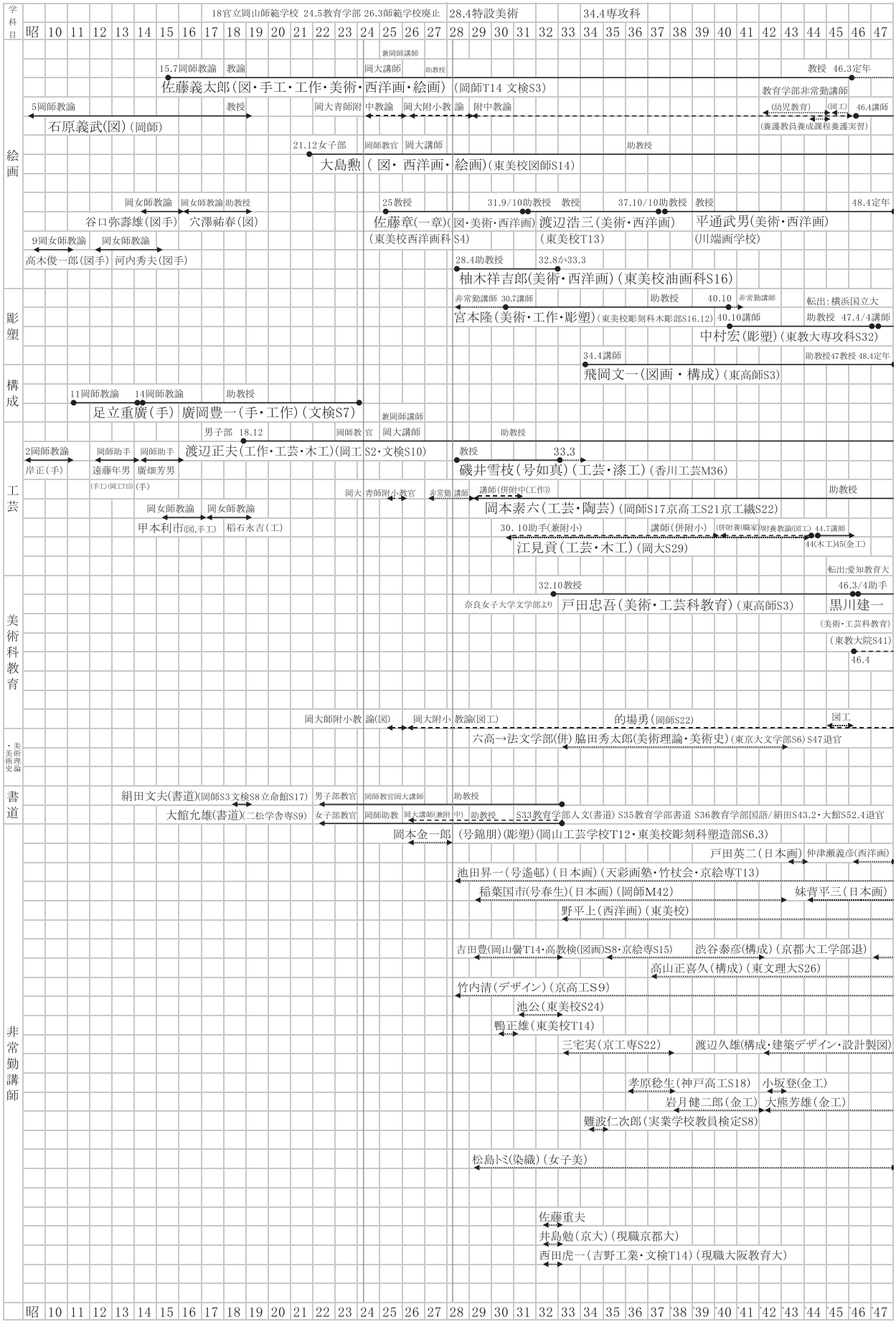
昭和39年２月に「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」が定められ[14]，教員養成大学・

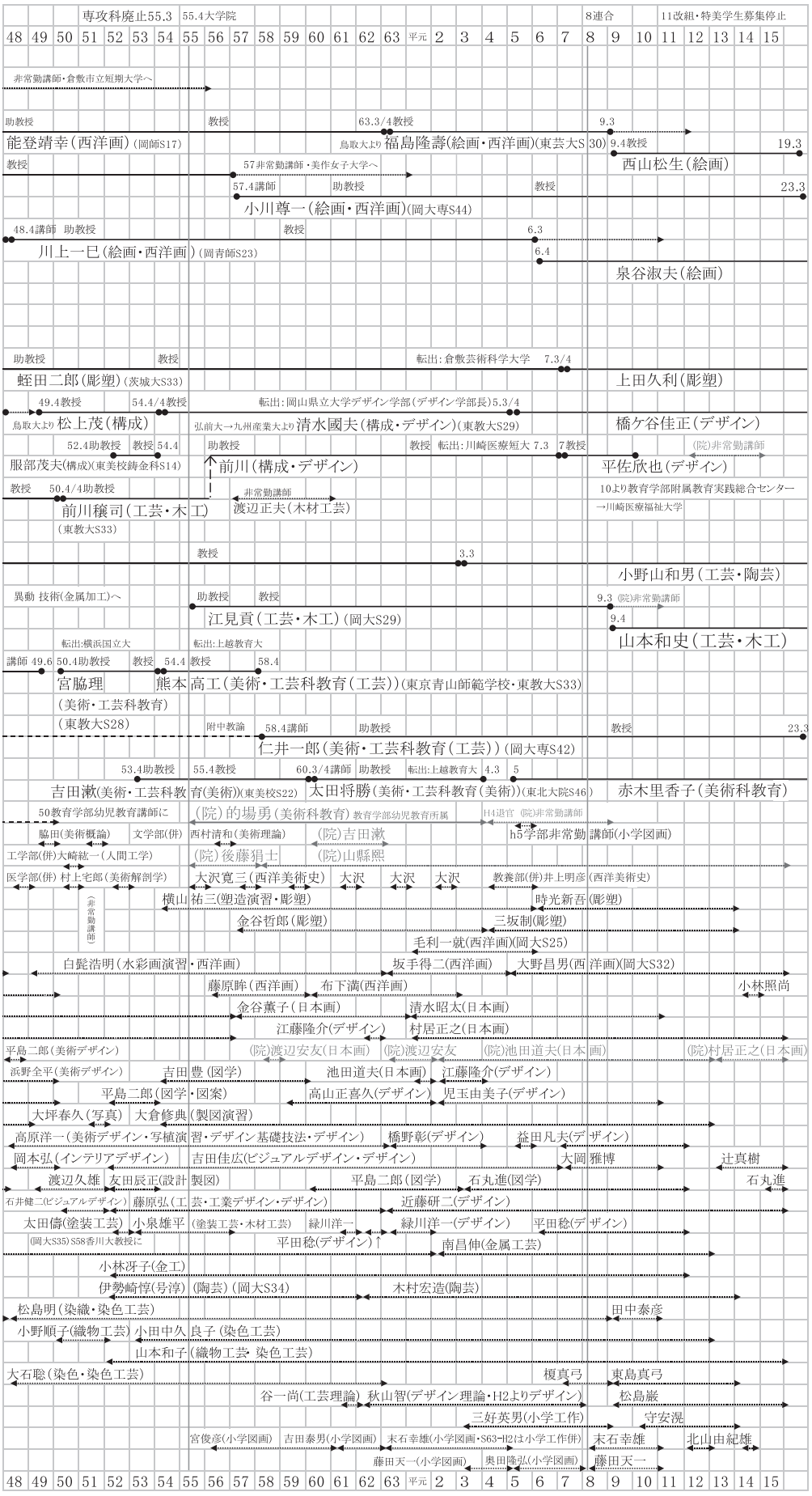
図１　昭和29年３月の写真
出典：やかげ郷土美術館編集・発行『岡大特美教室からの波動』（平成14年）

学部の美術講座に，絵画，彫塑，構成，美術理論・美術史，美術科教育を基本とする学科目が置かれることとなる。いわゆる学科目制度の発足である。それによって示された学科目は大学によって若干異なり，まず前年の昭和38年に，文部省から各大学にその大学ごとの学科目案の照会があった後[15]，昭和39年２月に同省令，同年４月に同省令の改正が定められた。同省令及び改正省令によると岡山大学には，西洋画，木工，陶芸，彫塑，構成，美術・工芸科教育が示された[16]。ちょうど当時の岡山大学の現員の専門に対応した形となっているように見える。それまでは多くの美術講座で，図画と工作あるいは美術と工芸といった漠然とした区分けであったが，図画工作に関することであれば何でもできる師範学校出身の教官が多かったこともあり，それで対応できていた。それが学科目制度を期に，教官の専門性が明確化していくこととなる。

ただ，特設美術の置かれていた岡山大学の場合，これに先んじて学科目（に類するもの）があったと思われる。美術・工芸の高等学校教員養成を主目的とした特設美術においては，専門的かつ多彩な美術・工芸に関する教育が要されるわけで，実質としても専門性の明確化は急務とされたであろう。岡山大学の特設美術開設期の学科目が明記された資料は確認できなかったが，同時期に特設美術の設置された大学のものは確認できた。昭和27年開設の京都教育大学では「美学・美術史，構成学，工芸学，絵画学－日本画，絵画学－西洋画，彫塑学の学科群」が設けられた[17]。昭和28年開設の佐賀大学では「学科目は日本画，西洋画，彫塑，構成，美術理論，木材工芸，金属工芸，窯芸，美術・工芸科教育と整備」された[18]。これら二例からも，岡山大学でも同様に学科目（に類するもの）があり，そこには多様な美術・工芸諸分野が置かれたと思われる。そして美術科教育は，佐賀大学のように初期から置かれた場合もあれば，京都教育大学のように設置直後はなかった場合もある。岡山大学の場合，昭和32年より戸田忠吾が美術・工芸科教育担当者として赴任し，授業も行った。ただ昭和38年までは洋画（一）

表1


学科目
18官立岡山師範学校 24.5教育学部 26.3師範学校廃止
28.4特設美術
34.4専攻科
昭 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47
絵画
兼岡師講師
15.7岡師教諭 教諭
岡大講師 助教授
教授 46.3定年
佐藤義太郎(図・手工・工作・美術・西洋画・絵画) (岡師T14 文検S3)
教育学部非常勤講師
5岡師教諭 教授 岡大青師附 中教諭 岡大附小教 論 附中教諭
(幼児教育) (図工) 46.4講師
石原義武(図) (岡師)
(養護教員養成課程養護実習)
21.12女子部 岡師教官 岡大講師 助教授
大島勲(図・ 西洋画・絵画)(東美校図師S14)
岡女師教諭 岡女師教諭 助教授 25教授 31.9/10助教授 教授 37.10/10助教授 教授 48.4定年
谷口弥壽雄(図手) 穴澤祐春(図) 佐藤章(一章)(図・美術・西洋画) 渡辺浩三(美術・西洋画) 平通武男(美術・西洋画)
(東美校西洋画科S4) (東美校T13) (川端画学校)
9岡女師教諭 岡女師教諭
高木俊一郎(図手) 河内秀夫(図手)
28.4助教授 32.8か33.3
柚木祥吉郎(美術・西洋画) (東美校油画科S16)
彫塑
非常勤講師 30.7講師 助教授 40.10 非常勤講師 転出:横浜国立大
宮本隆(美術・工作・彫塑)(東美校彫刻科木彫部S16.12) 40.10講師 助教授 47.4/4講師
中村宏(彫塑) (東教大専攻科S32)
34.4講師 助教授47教授 48.4定年
飛岡文一(図画 ・ 構成) (東高師S3)
構成
11岡師教諭 14岡師教諭 助教授
足立重廣(手) 廣岡豊一(手・工作) (文検S7)
兼岡師講師
工芸
男子部 18.12 岡師教官 岡大講師 助教授
2岡師教諭 岡師助手 岡師助手 渡辺正夫(工作・工芸・木工)(岡工S2・文検S10) 教授 33.3
岸正(手) 遠藤年男 廣畑芳男 磯井雪枝(号如真) (工芸・漆工) (香川工芸M36)
(手工)(岡工T15) (手)
岡大 青師附小教官 非常勤 講師 講師(併附中(工作)) 助教授
岡女師教諭 岡女師教諭
岡本素六(工芸・陶芸) (岡師S17京高工S21京工繊S22)
甲本利市(図,手工) 稲石永吉(工)
30. 10助手(兼附小) 講師(併附小) (併附兼(職家)) 附養教論(図工) 44.7講師
江見貢(工芸・木工) (岡大S29) 44(木工)45(金工)
転出:愛知教育大
美術科教育
32.10教授 46.3/4助手
奈良女子大学文学部より 戸田忠吾(美術・工芸科教育) (東高師S3) 黒川建一
(美術・工芸科教育)
(東教大院S41)
46.4
岡大師附小教 論(図) 岡大附小 教論(図工) 的場勇(岡師S22) 図工
・美術理論・美術史
六高→法文学部(併) 脇田秀太郎(美術理論・美術史) (東京大文学部S6) S47退官
書道
絹田文夫(書道)(岡師S3 文検S8 立命館S17) 男子部教官 岡師教官 岡大講師 助教授
大館允雄(書道)(二松学舎専S9) 女子部教官 岡師助教 岡大講師(兼附 中) 助教授 S33教育学部人文(書道) S35教育学部書道 S36教育学部国語/絹田S43.2・大館S52.4退官
非常勤講師
岡本金一郎 (号錦朋)(彫塑)(岡山工芸学校T12・東美校彫刻科塑造部S6.3)
戸田英二(日本画) 仲津瀬義彦(西洋画)
池田昇一(号遙邨) (日本画) (天彩画塾・竹杖会・京絵専T13)
稲葉国市(号春生)(日本画) (岡師M42) 妹背平三(日本画)
野平上(西洋画) (東美校)
吉田豊(岡山黌T14・高教検(図画)S8・京絵専S15) 渋谷泰彦(構成) (京都大工学部退)
高山正喜久(構成) (東文理大S26)
竹内清(デザイン) (京高工S9)
池公(東美校S24)
鴨正雄(東美校T14)
三宅実(京工専S22) 渡辺久雄(構成・建築デザイン・設計製図)
孝原稔生(神戸高工S18) 小坂登(金工)
岩月健二郎(金工) 大熊芳雄(金工)
難波仁次郎(実業学校教員検定S8)
松島トミ(染織) (女子美)
佐藤重夫
井島勉(京大) (現職京都大)
西田虎一(吉野工業・文検T14) (現職大阪教育大)



凡例

○横の実線は在職期間を示す。点線(┄)は非常勤講師としての在職期間，破線(---)は附属校在職期間を示す。

○横の線の両端の数字が就任と退任の年月を表す。

○横の線の端が黒丸の場合は就任あるいは退任の年(月)が明確であることを示す。

○横の線の端が矢印の場合はその時点までの勤務が確実であることを示す。

○横の線の上部には職位とその就任年月を示す。平成 24 年現在在職する教員に関しては示さないことを原則とする。

○後任者が前任者転退任年と同年の次月以降に就任した場合、その月の境を斜線(/)で示す。

○人名の後の括弧内には学科目ないし担当教科を示す。さらにその後に，修学校名の略記と卒業あるいは修了年月を示す。

○灰色の文字及び線は，所属が大学院であることを示す。

○大学院の人員，及び副手，技能補佐員は，紙幅の関係で示していない。

○主な修学校の略記は以下のように行う。岡師：岡山県師範学校(昭和 17 年以前)。岡山師範学校(昭和18年以降)。岡女師：岡山県女子師範学校。岡青師：岡山青年師範学校。男子部：岡山師範学校男子部。女子部：岡山師範学校女子部。岡大師：岡山大学岡山師範学校。岡大青師：岡山大学青年師範学校。岡大：岡山大学。岡工：岡山工芸学校。文検：文部省検定試験。東美校図師：東京美術学校図画師範科。東芸大：東京芸術大学。東高師図手：東京高等師範学校図画手工専修科。東文理大：東京文理科大学。東教大：東京教育大学。京絵専：京都市立絵画専門学校。京高工：京都高等工芸学校。京工繊：京都工芸繊維大学。香川工芸：香川県立工芸学校。

(二)，彫塑，工芸，美術理論の「区分」しかなかったので，戸田は美術理論に貼り付けられていたと思われる[19]。

なお，その後，資料に明示されていた岡山大学の学科目は次の通りである。昭和43年度は，日本画，西洋画，木工，染織，金工，陶芸，彫塑，構成，美術理論・美術史，美術工芸教育であった[20]。このうち定員のない，日本画，染織，金工等は非常勤講師が，美術理論・美術史は法文学部教官が兼担していた。昭和55年度・平成元年は共に，絵画，彫塑，美術・工芸科教育(美術)，構成，工芸，美術・工芸科教育(工芸)で，全て定員・現員が揃っていた[21]。

以下に，特設美術設置期の岡山大学美術講座の様相と，この時期の美術科教育の様相を順に記す。

①特設美術開設期　岡山大学特設美術設置にあたり，教官定員が増え，新たに多くの教官が要請されることとなった。そして，その要員は佐藤一章の意向に基づいて[22]，社会的に高名な作家を招聘することとなる。主たる要員は，日展における有力者であった。佐藤一章自身，日展の有力者であり，日展の岡山誘致の立役者であった。そして後任も日展および光風会・創元会・東光会といった日展系の作家が続く。佐藤一章の在任期間は6年程度であるが，その影響は後々まで続くように見える。

特設美術設置前後で美術講座の構成教官は以下のように変わった[23]。設置後，新たに，工芸主任教授として漆芸の磯井雪枝(号如真，以下如真)，助教授として西洋画の柚木祥吉郎が招聘された。美術講座の教官数が増加した。

特設美術設置前(昭和26年)	
教授	佐藤一章
講師	佐藤義太郎
講師	大島勲
講師	渡辺正夫
講師	絹田文夫(書)
講師	大館允雄(書)
非常勤講師	岡本金一郎(号錦朋)

特設美術設置後(昭和28年)	
教授	佐藤一章:美術主任教授
教授	磯井如真:工芸主任教授
助教授	柚木祥吉郎
助教授	佐藤義太郎
助教授	絹田文夫(書)
講師	大島勲
講師	渡辺正夫
講師	大館允雄(書)
非常勤講師	池田昇一(号遥邨)
非常勤講師	宮本隆
非常勤講師	竹内清
非常勤講師	岡本素六

佐藤一章(明治38－昭和35)[24]は，岡山県に生まれ，昭和4年に東京美術学校西洋画科卒業，その後日展・帝展・光風会展等で作品発表受賞を重ねる。昭和22年に日展審査員となり，山陽新聞社の要請を受けて日展の岡山誘致に奔走し，翌23年初めての日展地方展開催を実現させる。昭和25年岡山大学教育学部の美術講座の主任教授となった。

磯井如真(明治16－昭和39)[25]は，香川県に生まれ，明治36年に香川県立工芸学校容器漆工科卒業，その後幾つかの職を経つつ多くの作品発表受賞を重ねる。日展招待出品や日展審査員をつとめる等の重鎮であった。大学赴任3年後の昭和31年に重要無形文化財(蒟醤(きんま))の保持者に認定され，人間国宝となった。大学赴任時は齢70歳で，定年制度に囚われない特別採用だったと思われる。

西洋画の柚木祥吉郎[26](大正8－平成17)は，洋画家柚木久太の長男として東京に生まれる。祖父・弟も画家の一家であった。昭和16年に東京美術学校油画科を卒業し，その後日展や一水会等で入選受賞を重ねる。昭和28年より日展委嘱出品，一水会会員推挙となり，同年に岡山大学に赴任する。昭和32年日展不出品を決め，一水会を退会する。この頃岡山大学を去る。その後春陽会等で活躍し，ノートルダム聖心女子大学名誉教授となった。

岡山大学の西洋画教官の系譜は日展系作家が続く。佐藤一章の後任は，渡辺浩三・平通武男・川上一巳まで，佐藤義太郎の後任は，能登靖幸・福島隆壽・西山松生まで，大島勲の後任は，小川一尊まで，日展系作家が代々続く。なお遡って初期の岡山県師範教官であった石原義武も創元会等の日展系画壇で活躍した画家であった。日展系以外の西洋画教官の登場は，平成6年赴任の泉谷淑夫までなかった。

彫塑も同様に，最初期の非常勤講師の岡本錦朋の頃から，その後任の宮本隆・中村宏・蛭田二郎・上田久利まで日展で活躍する作家が継続している。

非常勤講師は，例えば二科会の竹内清など在野作家も見えるが，やはり日展系作家が多い。岡山師範学校及び岡山大学卒業生も多い。後に人間国宝となる伊勢崎惇(号：淳)や太田儔も岡山大学卒業後に非常勤講師に名を連ねる。特に初期の非常勤講師はかなり重きを置かれていた様子が垣間見える記録もある[27]。特設美術における美術工芸諸分野の充実した指導のため，当然ながらそれに応じて専門的かつ多彩な非常勤講師が必要とされたのであろう。

この時期，全国的に教員養成大学・学部の美術講座には大なり小なり実技重視すなわち教科専門重視の気風があった。特設美術設置により，岡山大学ではそれがいっそう強まったと思われる。教官数は増加し，著名な作家による専門的な指導がなされ，さらに卒業生の多くも学校教員としてはもちろん，作家としても精力的に活躍していた。教官も学生もその多くは特設美術に大きな誇りをもっていたであろう。

②この時期の美術科教育　特設美術開設後は，学科目(に類するもの)が置かれたが，美術科教育の学科目が置かれるのは昭和39年の学科目整備の頃と思われる。ただ，それ以前の昭和32年に戸田忠吾がその担当者として赴任する。『岡山大学要覧』によると，戸田の赴任直後の昭和42年度は，美術・工芸科教育関係授業の大部分を戸田が，幾つかを旧師範学校教官の佐藤，渡辺，大島が担当していた[28]。戸田の後任として，昭和46年に黒川建一が赴任する。

戸田忠吾[29](明治38－？)(昭和8年君島から戸田に改姓)は，大正14年3月に栃木県師範学校卒業，同年3月に栃木県訓導，同年4月に東京高等師範学校入学および昭和3年3月に同校卒業，その卒業直後に福井県師範学

校に赴任する。さらに昭和４年８月福島県師範学校教諭となる。昭和15年11月から昭和21年３月まで奈良県女子師範教諭兼訓導となる。その後同付属中学校及び高等学校兼任を経て，奈良女子大学文学部より，昭和32年10月岡山大学教育学部に転任となった。著書に『農村手工教育』（昭和14年），『技術科教育論』（昭和35年）等がある。

黒川建一[30]（昭和11年－　）は，三重県に生まれ，昭和35年に東京教育大学芸術学科（彫塑専攻）卒業，昭和35年に同大学教育学科（教育方法専攻）卒業，昭和41年に同大学大学院修士課程（教育方法専攻）修了をする。三重大学で非常勤講師を勤め，その後，昭和46年４月に岡山大学に赴任する。昭和49年６月愛知教育大学（幼児教育）に転出した。著書に『保育としての造形指導』（昭和50年），その他幼児教育・保育における表現・造形に関する編著書が多数ある。

なお，戸田の赴任と同じ頃，法文学部助教授の脇田秀太郎が美術理論・美術史の分野を兼担することとなる。大学移行期の大幅な教官供出の交換条件に「教育学部中等教員養成課程の教科専門中，人文系は法文学部，理科系は理学部が担当する」というものがあったらしい[31]。これと直接関係するかははっきりしないが，岡山大学教育学部では美術理論・美術史の専門教官は，これ以降，現在に至るまで不在で，代々，法文・文学部教官が兼担することとなる。

岡山大学の場合，昭和39年学科目制度以前に美術科教育を専門に担当する教官がいた。これは全国的に早く，特筆すべき点である。岡山大学においては，制度的に美術科教育の専門性が保証される以前に，人的整備がなされ，美術科教育の専門性が実質化されたと言えよう。

ただし，戸田は手工・技術科教育を専門とする研究者であった。戸田の後任の黒川建一は幼児教育を専門とする研究者であった。どちらも美術科教育と全く関係ないわけではないが，それを中心の研究とするわけでもない。美術科教育を研究内容とする名実共に美術科教育を専門とする教官の赴任は，全国的にそうであったように岡山大学の場合も院の設置を待つ。

⑶教科教育専攻大学院の設置と展開

①教科教育大学院の設置　昭和55年４月に岡山大学大学院教育学研究科が設置された。美術教育専攻は第一陣として同年に開設された。

既述のように，美術科教育専攻大学院設置の時期に関して，岡山大学は全国的に早い部類にあたる。その頃，美術科教育を専門とする人材は僅かにしか存在しなかった。院設置には教科教育のマル合教官と合教官が１名ずつは必要で，マル合教官となり得る美術科教育の業績をもつ者はさらに稀であった。なお昭和38年に東京芸術大学に全国初の美術教育専攻大学院が設置され，そこで美術科教育を専門とする研究者の養成が進んでいったわけであるが，修了生は僅かで，まだ若く大学院のマル合教官となるには時期尚早の場合が多かったであろう。そういった状況において，美術科教育専攻大学院早期は，美術科教育を専門とする限られた人員が，院設置のための要員として，全国を渡るという様相が見られた。

そのような背景の中，岡山大学に美術科教育担当として赴任するのが，宮脇理である。文部省教科調査官であった宮脇が，黒川建一の後任として昭和50年４月に招聘された。

宮脇理[32]（昭和４－　）は，東京に生まれ，昭和28年に東京教育大学教育学部芸術学科を卒業する。その後，北海道学芸大学助手・同大学講師，東京教育大学附属小学校教諭，福島大学助教授，文部省教科調査官を経て，昭和50年に岡山大学助教授として赴任する。昭和54年に転出し，横浜国立大学教授となり同大学大学院の創設，さらにその後筑波大学教授となり同大学博士課程に芸術教育学の分野の創設に寄与する。筑波大学定年退官後，佐賀大学教授となり同大学大学院設置に尽力する。その他福島大学・大分大学の大学院創設時にも非常勤講師で助力した。

宮脇は，岡山大学，横浜国立大学と立て続けに院設置要員として異動を重ねる。昭和54年４月に岡山大学を去り，同年４月に横浜国立大学へ移っている。院設置の時期は，岡山大学は昭和55年４月で，横浜国立大学は昭和54年４月である。当然ながら院設置の前に，その審査は行われる。岡山大学の場合，昭和54年４月以前の宮脇で準備を行い，その後，熊本高工に引き継いだのであろう。また横浜国立大学の場合，昭和54年４月院設置と同時に宮脇は赴任しており，赴任以前に審査を通過していたのは確かであろう。これらからも，それだけ美術科教育を専門とする人材が不足していたことと，大学院設置が大改革であったことが推察される。

そして宮脇の後任として，熊本高工（たかのり）が昭和54年４月に，それとは別に新たに吉田漱（すすぐ）が昭和53年４月に赴任する。

熊本高工[33]（大正７－平成20）は，山梨県に生まれ，昭和13年東京府青山師範学校を卒業する。昭和30年まで東京都公立小学校教諭として勤務し，その間に，昭和13年海軍短期現役兵，平成17年早稲田大学専門学校政治経済学科卒業，昭和23年東京美術学校油画科内地留学修了となる。さらに昭和32年に東京教育大学芸術学科構成専攻卒業し，その後お茶の水大学附属中学校に勤める。昭和44年に女子美術大学教授，昭和49年に東京造形大学教授を経て，昭和54年に岡山大学教育学部に教授として赴任する。昭和56年には工芸主任となる。その後，昭和58年に上越教育大学に教授として転出し，そこでも昭和61年に美術主任となり，昭和62年定年退官した。同年造形美術教育研究所長となった。

吉田漱[34]（大正11－平成13）は，昭和22年３月東京美術学校油画科を卒業し，東京都内の中学校・高等学校教諭で約30年間勤務の後，昭和53年４月岡山大学に赴任する。在任中に高等学校学習指導要領協力者主査をつとめる。浮世絵研究家であり，歌人でもあった。

岡山大学の場合，宮脇の助走があり，それを熊本が継ぎ，さらに吉田が加わり，美術科教育専門の教官が揃い，昭和55年４月に教科教育専攻大学院が設置される。岡山

大学の場合，この時期，美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。

その後の様相も示しておく。熊本の上越教育大学への転出に伴い，昭和58年４月に仁井一郎が赴任する。仁井は，岡山大学教育学部及び同専攻科卒業・修了生で，岡山県公立中学校勤務の後，同附属中学校教諭として12年にわたる奉職の後，岡山大学に赴任する。

吉田の後任として，太田将勝が昭和60年４月に，さらにその後任として赤木里香子が平成５年に赴任することとなる。太田は東北大学大学院文学研究科美学美術史学専攻修了後，中・高等学校教諭及び美術館学芸員等を経て，岡山大学に赴任し，平成４年３月に上越教育大学へ転出した[35]。赤木は筑波大学大学院博士課程芸術学研究科芸術学専攻を修了し，美術教育関係で最初に課程博士号(芸術学)を取得した後，岡山大学に赴任した[36]。

なお，学部と大学院ではその組織構成が異なり，学部の所属と大学院の所属が異なることがある。岡山大学では，教育学部では幼児教育専攻に所属する的場勇が，大学院では美術教育に所属し，美術科教育を担当するということがあった。的場は，岡山師範学校出身で，岡山大学教育学部附属校で主に図画工作担当として長年勤務の後，岡山大学教育学部幼児教育専攻に赴任した。また吉田は，学部では美術・工芸科教育，大学院では「絵画」に所属していたとする資料もある[37]。吉田は浮世絵をはじめとする絵画研究者でもあったためであろうか。

学部においては，美術・工芸の高等学校教員養成を目的する特設美術ということから，教科教育が二人体制となった大学院設置後は，指導領域を美術と工芸とに分担するようになったようである。吉田・太田・赤木が美術，熊本・仁井が工芸であった。

岡山大学における美術科教育専攻大学院設置の美術科教育以外の様相にも少しだけ触れておく。多くの大学でそうであったように，院設置を期に，担当学科目の移動があった。それまで工芸(木工)を担当していた前川穣司が構成に移り，工芸(木工)に技術講座から江見貢が戻ってきた。江見は岡山大学教育学部卒業生で，長らく美術講座の助手・講師と附属学校教諭を兼務し，昭和44年に工芸(木工)担当として美術講座に赴任し，その直後に技術講座に移り，昭和55年大学院設置の時期に美術に戻ってきた。

また，大学院設置の時期に実技専門教官の多くが論文を作成していた。作品業績が充分に足りていたであろう日展系教官まで作成していた。大学院設置に際して文部省から示唆されるらしいコンセプトは大学ごとに異なるそうである。岡山大学の場合は美術科教育大学院に相応しく，実技専門教官も論文業績を要求されたのかも知れない。

その後，平成８年４月に，兵庫教育大学，上越教育大学，岡山大学，鳴門教育大学の四大学からなる，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科が設置される。岡山大学ではちょうどその前後に人員の異動が幾つか見られる。この連合大学院の設置により美術教育学の制度的基盤は新たな段階に入ったと思われるが，それについては本稿の考察範囲の対象外となるので，設置された事実を示すに止める[38]。

以上のように，岡山大学の場合，大学移行当初は全国的にそうであったように美術科教育の学科目も専門の担当者も不在であったが，その後は学科目制度発足以前に美術科教育の専門の担当者が赴任し，教科教育専攻大学院も早期に設置されたというように，全国の中でも先がけて美術教育学の制度的基盤が成立していった。また，特設美術設置によって，当時全国的にそうであった教科専門重視の傾向がよりいっそう強まったにもかかわらず，早期の美術科教育の人的整備，大学院の設置，さらに連合大学院の設置や学部改組に伴い，徐々に教科教育専門が重視されていったように見える。

４．結　　論

岡山大学の美術教育学の制度的基盤の成立過程(人的制度の成立と人的配置)を以下のように明らかにした。

１．岡山師範学校から岡山大学教育学部への移行期：美術科教育を専門とする教官はいなかった。当然ながら，制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず，「美術教育学」も認識されていなかった。

２．学科目の設置と具体的人員の配置：昭和39年学科目制度以前に，美術科教育を専門に担当する教官がいた。最初に昭和32年より戸田忠吾，その後任として黒川建一が担当した。制度的に美術科教育の専門性が保証される以前に，それを担当する教官がいて，美術科教育の専門性が実質化された。

３．教科教育専攻大学院の設置と展開：宮脇理，熊本高工，吉田漱らの赴任により，美術科教育を専門とする教官が揃い，昭和55年４月に教科教育大学院が設置された。岡山大学の場合，この時期，美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。

以上のように，岡山大学における美術科教育学の制度的基盤は成立したと結論する。

謝辞

調査にあたってご協力いただいた諸氏に厚く御礼申し上げる。

付記

本稿は，本学における平成23年度「若手教員に対する支援」による研究成果の一部である。

註

1）有田洋子「美術科教育学の制度的基盤の成立過程―島根大学における人的制度と配置―」『島根大学教育学部紀要（教育科学）第45巻，平成23年，47-55頁。金子一夫・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程―東京芸術大学の場合―」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第62号，平成25年（掲載予定）。

2）文部省『学制百年史』（帝国地方行政学会，昭和47年）933頁の「教員養成課程の整備・充実」に「中学校および高等学校の教科担当の教員のうち，供給が困難なものについては，国が計画的にその養成を図ることとし，二十七年度から，数学，理科，音楽，美術・工芸，書道，保健体育および看護について特別教科教員養成課程を，国立の教員養成大学・学部に設置してきている。」とある。

3）次の資料を参照して表を作成した。岡山大学二十年史編さん委員会『岡山大学二十年史』（昭和44年），岡山大学30年史編纂委員会『岡山大学史（昭和44年～昭和54年）』（昭和55年），岡山大学40年史編さん委員会『岡山大学史（昭和54年～平成元年）』（平成２年），岡山大学創立50周年記念事業委員会『岡山大学史（平成元年～平成11年）』（平成11年）。中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和５-７，９-12年版。岡山県教育会『岡山県学事関係職員録』昭和２-５，8-18，22-25，27-40年度。岡山大学『岡山大学職員録』昭和24-平成15年度。岡山大学『岡山大学要覧』昭和30-31，34，36，38-43年度。岡山大学庶務部庶務課『岡山大学研究者総覧1992』（平成５年）。昭和５年度から平成15年度にかけて年度ごとの職員録や名簿を確認することを原則としたが，昭和19-21年度のものだけは確認できなかった。

なお，在職期間等について，一部はっきりしないことがあった。佐藤一章の退官年月は，岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，244頁では31年９月，やかげ郷土美術館編集・発行『没後40年 佐藤一章展』（平成12年）同編集・発行『岡大特美教室からの波動』（平成14年）では，昭和30年９月となっている。当時のことをご存知の方によると昭和31年９月であろうとのことであったので，表にはそのように示す。柚木祥吉郎の退官年月は，岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，234頁の「退官者及び転出者」表では，昭和32年８月16日とあり，245頁の各専攻紹介では昭和33年３月とあった。『岡山大学職員録』に最後に柚木の名前が見られたのは昭和32年版（昭和32年11月１日現在，11月５日発行）であり，昭和33年３月が正しいのかも知れないが，断言できないので，可能性のある年月を共に示しておいた。また，江見貢は，『岡山大学職員録』『岡山県学事関係系職員録』では昭和30年10月から助手とあり，『岡大特美教室からの波動』６頁には，卒業後すぐに磯井如真付きの副手となったと本人による記述があった。本表は，副手は示さないこととしており，表には反映されないが，ここに記録しておく。

4）岡山大学に関する基本的事項は次の文献を参考にした。岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，岡山大学30年史編纂委員会，前掲書，岡山大学40年史編さん委員会，前掲書，岡山大学創立50周年記念事業委員会，前掲書。

5）岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，195頁。

6）佐藤義太郎は，岡山県教育委員会『岡山県学事関係職員録』昭和15，16年度では「図手」，昭和17年度では「図工作」を担当したとある。

7）岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，244頁。

8）渡辺正夫に関しては，岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，245頁，岡山大学30年史編纂委員会，前掲書，155頁を主に参照した。

9）大島勲に関しては，岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，244頁，岡山大学30年史編纂委員会，前掲書，154頁を参照した。

10）岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，195頁。

11）岡山県教育委員会『岡山県学事関係職員録』によると，昭和28-30年度版では，絹田も大館も「美」もしくは「美術」に分類されていた。その後昭和31-32年度版では，「書道」と明記されるものの，美術教官の名と隣接していた。昭和33年度版より，教育学部人文（後の国語）に分類された。この頃の『岡山大学要覧』における記載にも同様の変遷が見られる。

12）岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，202頁。

13）『岡山大学職員録』昭和25年度（10月30日現在）。

14）「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」及び同省令の一部を改正する省令に関しては，現代日本教育制度史料編集委員会編『現代日本教育制度史料25』（東京法令出版株式会社，昭和62年）286-457頁及び511-688頁を参照した。

15）東京学芸大学二十年史編纂委員会『東京学芸大学二十年史―創基九十六年史―』（昭和45年）82-86頁。なお，同書によると，昭和38年に文部省から照会された原案に対して，とうていこれを容認することはできないという意見が高まり，また地方大学の学芸学部・教育学部からも訴えや問い合わせが届けられたらしい。

16）現代日本教育制度史料編集委員会編，前掲書，415，644頁。

17）京都教育大学開学三十年周年記念誌編纂委員会編集『京都教育大学開学三十年周年記念誌』（昭和55年）91頁。

18）中牟田佳彰・前村晃「佐賀大学美術・工芸小史―特

設美術科創設より美術・工芸課程まで―」2頁（佐賀大学文化教育ホームページで公開（http://sadaibico.pd.saga-u.ac.jp/pdf/history.pdf）（平成24年9月20日確認）

19）岡山大学教育学部事務部『岡山大学教育学部概況』昭和33・34・38年度編を参照した。

20）「昭和43年度学科目別定員および現員」を参照した（岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，282-283頁）。

21）「昭和55年度講座および学科目別店員および現員」（岡山大学30年史編纂委員会，前掲書，141，142頁），及び「平成元年度講座及び学科目別定員及び現員」（岡山大学40年史編さん委員会，前掲書，144-146頁）を参照した。

22）新たに招聘された教官らによる当時の回想録に，佐藤一章からの依頼であったことが記される。竹内清は，佐藤一章から特設美術設置要員として，デザイン担当の助教授で来てくれないかという依頼があり，非常勤講師という条件で受けたという。宮本隆も，佐藤一章の要望で，彫塑の非常勤講師の岡本欽朋の後任の依頼があり，その後任者が見つかるまでという条件で引き受けたという。（やかげ郷土美術館編集・発行，前掲書，4，5頁）。

23）『岡山県学事関係職員録』昭和24・25・27・28年度版及び『岡山大学職員録』昭和24-28年度版を参照した。

24）佐藤一章に関しては，やかげ郷土美術館編集・発行，前掲書，及び同『やかげ郷土美術館開館20周年記念佐藤一章展／一章ゆかりの画家展』（平成22年），岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，244，245頁を参照した。

25）磯井如真に関しては，岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，245頁およびやかげ郷土美術館『岡大特美教室からの波動』（2002年）6，7，50頁を参照した。

26）柚木祥吉郎に関しては，やかげ郷土美術館編集・発行，前掲書，52頁，岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，245頁を参照した。

27）例えば，竹内清による当時の回想録によると，大学入試のデッサン試験の監督採点にも携わったらしい（やかげ郷土美術館編集・発行，前掲書，4頁）。

28）『岡山大学要覧』（自昭和41年度至昭和42年度）（昭和42年発行）によると，昭和42年度は，教科教育法七つ中，五つを戸田（美術・工芸科教育法通説，美術指導法，工芸指導法，工芸教材論A・B），二つを大島（美術教材論A・B）が担当した。教材研究二つ中、図画工作教材研究Aを佐藤義太郎と渡辺正夫が，図画工作教材研究Bを大島と戸田が担当した。

29）戸田忠吾に関しては，岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，245頁，岡山大学30年史編纂委員会，前掲書，155頁，『美育』記事，『奈良女子高等師範学校一覧　昭和十八年度』等を参照した。

30）黒川建一に関しては，岡山大学30年史編纂委員会，前掲書，155頁，黒川建一『保育としての造形指導』（日本文教出版，昭和50年）奥付頁にある略歴を参照した。

31）岡山大学二十年史編さん委員会，前掲書，199頁。

32）宮脇理に関しては，岡山大学30年史編集委員会，前掲書，155頁，佐賀大学教育学部美術・工芸科『美術・工芸教育学』第2号「宮脇理先生退官記念号」213頁を参照した。

33）熊本高工に関しては，岡山大学30年史編集員会，前掲書，155頁，岡山大学40年史編さん委員会，前掲書，169頁，熊本高工『児童画の歴史』（日本文教出版）（昭和63年）奥付にある略歴を参照した。

34）吉田漱に関しては，岡山大学30年史編集員会，前掲書，154頁，岡山大学40年史編さん委員会，前掲書，169頁，国際浮世絵学会会誌『浮世絵芸術』No.142（平成14年）32-35頁，山陽新聞掲載「岡大の顔」167号を参照した。

35）太田将勝に関しては，岡山大学40年史編さん委員会，前掲書，168頁，岡山大学創立50年周年記念事業委員会，前掲書，227頁，および太田将勝ホームページ（http://www.ota-mas.com/hihyou.html）を参照した（平成24年9月20日確認）。

36）赤木里香子に関しては，筑波大学芸術学系芸術教育学研究室『藝術教育学』第4号，平成4年，179頁を参照した。

37）『岡山大学概要』昭和50-60年度を参照した。なお，大学院非常勤講師の美学者の後藤狷士や山縣熙も「絵画」の所属とされ，この場合の「絵画」は研究対象を示すのであろう。ただ，吉田は東京美術学校油画科卒業で，当然ながら非常に絵が上手かったそうで，実技指導も十分に可能であったと思われる。

38）その後の岡山大学の展開を簡単に示しておく。さらに，平成11年度に学部改組により特設美術の学生が募集停止となる。教官定員と学生定員は，学校教育教員養成課程小学校教育専攻，学校教育教員養成課程中学校教育専攻，新たに開設したいわゆるゼロ免課程の総合教育課程生涯教育コースに分けられた。平成16年の国立大学法人化後の平成18年に総合教育課程は廃止となり，再び学校教育教員養成課程の小学校・中学校教育コースからなる教育体制に再編され，美術関係教員もここにまとめられた。現在も教科教育二人体制は維持されたまま続いている。